

平成25年 9 月 4 日
 水稻の作柄に関する委員会

水稻の作柄に関する委員会（平成25年度第2回）の意見

- 1 8月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響
 - (1) 6月以降、気温は7月中下旬の東北太平洋側を除き、全国的に平年より高く推移し、特に8月は中旬を中心に全国的に著しく高くなった。また、日照時間は地域によって変動が大きかったものの、おおむね平年を上回って推移した。
 今後の天候の見通しでは、気温は平年並みないし高く、日照時間は平年並みないし少なく推移すると予想されている。
 - (2) 本年の水稻は、初期生育が遅れた地域があるものの、その後生育は回復しているとみられ、現時点までは大きな減収要因は見当たらないが、登熟期間となる8月以降高温で推移していることからすると、登熟や品質への影響が懸念される。また、気象条件によりいもち病や斑点米カメムシ類等の発生が懸念される地域がある。
- 2 次回の調査に当たって留意すべき事項
 - (1) 出穂期以降が高温で推移している地域においては、登熟や品質への影響に留意する必要がある。特に、高温とともに用水不足となっている地域ではその影響が大きく出る懸念があるので留意する必要がある。
 - (2) 7月中下旬に寡照・長雨となった東北においては、もみ数への影響を見極める必要がある。また、6月に寡照であった九州をはじめとする地域では、穂数・もみ数への影響を見極める必要がある。
 - (3) 7月から9月初めにかけて大雨による冠水や倒伏が発生した地域では、その影響を見極める必要があるとともに、今後の台風及び集中豪雨による作柄への影響に留意する必要がある。
 - (4) 穂いもち、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況に留意する必要がある。
- 3 次回のもみ数確定期調査の調査期日
 本年の水稻の出穂状況は、一部で早まっているところもあるが、全般的にはおおむね平年並みとなっていることから、次回のもみ数確定期調査は例年どおり9月15日現在とすることが適当と考える。

【参考】

水稻の作柄に関する委員会委員

- | | |
|------------|--|
| (座長) 染 英 昭 | 公益財団法人中央果実協会副理事長 |
| 黒 田 栄 喜 | 国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程教授 |
| 中 園 江 | 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター東海研究拠点
情報利用研究領域主任研究員 |
| 長 谷 川 利 弘 | 独立行政法人農業環境技術研究所大気環境研究領域上席研究員 |
| 平 澤 正 | 国立大学法人東京農工大学大学院農学研究院教授 |
| 藤 川 典 久 | 気象庁地球環境・海洋部気候情報課予報官 |
| 山 岸 順 子 | 国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構准教授 |

水稲の作柄に関する委員会（平成26年度第2回）の意見

- 1 8月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響
 - (1) 7月までは一部地域を除いて気温・日照時間とも平年並みから平年を上回り推移したものの、四国・九州の一部地域では6月から7月にかけて低温・寡照傾向で推移した。なお、北海道や関東の一部地域を除き8月以降は全国的に低温・寡照条件が続いており、西日本では記録的日照不足で推移するとともに、台風や前線の影響で局地的な大雨が発生した。
今後の天候の見通しでは、今後2週間程度は低温・寡照が続くと見込まれ、その後は気温・日照時間ともにおおむね平年並みで推移すると予想されている。
 - (2) 本年の水稲は、早場地帯ではもみ数は確保されているとみられるものの、8月以降の北海道や関東の一部地域を除き全国的な日照不足等により、早場地帯で登熟・品質への影響や、遅場地帯でもみ数への影響が懸念されるとともに、いもち病等の発生が懸念される地域がある。
- 2 次回の調査に当たって留意すべき事項
 - (1) 早場地帯の地域においては、もみ数が多い条件下で8月以降の日照不足等が登熟や品質に及ぼす影響に留意する必要がある。
 - (2) 6月以降断続的に寡照・長雨となっている近畿以西の西日本においては、もみ数への影響を見極める必要がある。
 - (3) 8月の局地的な集中豪雨による冠水や倒伏が発生した地域では、その影響を見極める必要があるとともに、今後の台風及び集中豪雨による作柄への影響に留意する必要がある。また、北陸等一部地域においては、フェーン現象等による白穂の発生もみられることから、これらに留意する必要がある。
 - (4) いもち病、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況に留意する必要がある。
- 3 次回のもみ数確定期調査の調査期日
本年の水稲の出穂状況は、遅場地帯の出穂最盛期で平年に比べておおむね2日程度の遅れに止まっていると見込まれることから、次回のもみ数確定期調査は例年どおり9月15日現在とすることが適当と考える。

【参考】

水稲の作柄に関する委員会委員

- | | |
|------------|--|
| (座長) 染 英 昭 | 公益社団法人大日本農会会長 |
| 黒 田 栄 喜 | 国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程（作物学研究室）教授 |
| 中 園 江 | 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター東海研究拠点
情報利用研究領域主任研究員 |
| 平 澤 正 | 国立大学法人東京農工大学大学院農学研究院教授 |
| 藤 川 典 久 | 気象庁地球環境・海洋部気候情報課予報官 |
| 山 岸 順 子 | 国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構准教授 |
| 吉 永 悟 志 | 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター
北陸研究センター水田利用研究領域上席研究員 |

水稻の作柄に関する委員会（平成27年度第2回）の意見

1 8月15日現在調査以降の気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 東日本を中心に、7月までは一時的な低温等があったものの全般的に高温・多照で経過した一方で、四国及び九州を中心とした西日本では6月から7月にかけて低温・寡照傾向となった。

また、7月下旬から8月上旬は全国的に高温・多照で経過したものの、その後は低温・日照不足傾向へと顕著な気象条件の変化が生じており、今後も1～2週間程度は低温・日照不足の状況が続くと見込まれている。

- (2) 本年の水稻は、早場地帯ではもみ数が平年並み以上に確保されているとみられるものの、7月下旬以降の高温やその後の日照不足等による登熟・品質への影響が懸念されるとともに、遅場地帯では6月から7月にかけての低温・日照不足等によるもみ数への影響が懸念される。

また、8月下旬の台風第15号による影響が懸念されるほか、いもち病や斑点米カメムシ類等の発生が多いと予想されている地域もある。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 早場地帯の地域においては、もみ数が多い条件下で、出穂後の高温や8月中旬以降の日照不足等が登熟や品質に及ぼす影響に留意する必要がある。
- (2) 6月から7月にかけて低温・日照不足となった西日本の遅場地帯においては、もみ数への影響を見極める必要がある。
- (3) 8月下旬の台風第15号の影響により倒伏等が発生した地域では、その影響を見極める必要があるとともに、今後の台風や集中豪雨等による作柄への影響にも留意する必要がある。
- (4) いもち病、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況に留意する必要がある。

3 次回のもみ数確定期調査の調査期日

本年の水稻の出穂状況は、遅場地帯の出穂最盛期が平年に比べ1～3日程度の遅れに止まっていると見込まれることから、次回のもみ数確定期調査は、例年どおり9月15日現在とすることが適当と考える。

【参考】

水稻の作柄に関する委員会委員

- (座長) 染 英 昭 公益社団法人大日本農会会長
- 黒 田 栄 喜 国立大学法人岩手大学農学部農学生命課程（作物学研究室）教授
- 竹 川 元 章 気象庁地球環境・海洋部気候情報課予報官
- 中 園 江 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター
東海研究拠点情報利用研究領域主任研究員
- 平 澤 正 国立大学法人東京農工大学大学院農学研究院教授
- 山 岸 順 子 国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構准教授
- 吉 永 悟 志 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター
北陸研究センター水田利用研究領域上席研究員